

芸術文化創造センター整備推進委員会 管理運営専門部会 第2回会議 議事録

日時：平成 25 年 9 月 10 日（火） 18:00～20:00

場所：生涯学習センターけやき大会議室

出席者

[委員]

	氏 名	選出区分	所属等
委員長	桧森 隆一	文化政策 アートマネジメント	嘉悦大学教授 / 地域産業文化研究所所長
委員	伊藤由貴子	劇場運営 音楽系	神奈川県立音楽堂館長 / 神奈川芸術文化財団
委員	井上 允	劇場運営 市民活動	元厚木市文化会館館長
委員	三ツ山一志	施設運営 展示系	横浜市民ギャラリー館長 横浜市民ギャラリーあざみ野館長 横浜市芸術文化振興財団

桧森委員長は所用により欠席

[事務局]

所 属	役 職	氏 名
文化部	文化部長	諸星 正美
文化部	文化部副部長	原田 泰隆
文化部管理監	文化部管理監	瀬戸 伸仁
文化部文化政策課	文化政策課長	中津川 英二
文化部文化政策課	文化芸術担当課長	間瀬 勝一
文化部文化政策課	文化政策課副課長	志村 康次
文化部文化政策課	芸術文化創造係長	高瀬 聖
文化部文化政策課	芸術文化創造係主任	松井 真理子
文化部文化政策課	芸術文化創造係主任	富士原 直也

[事務局補]

所 属	氏 名
空間創造研究所	草加 叔也
空間創造研究所	瓜生 陽

[傍聴者]

7名

次第

1. 開会

2. 議題

(1) 市民ワーキング報告について

(2) 芸術文化創造センターの重点事業について

(3) その他

3. 閉会

1. 開会

事務局

ただ今より、芸術文化創造センター整備推進委員会管理運営専門部会第2回会議を開催する。
本日は管理運営分科会長松森委員が欠席のため、会議の進行は井上委員にお願いする。

2. 議題 (1) 市民ワーキング報告

井上委員

市民ワーキング報告について、事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

井上委員

第1回、第2回市民ワーキング管理運営部会に参加した感想を申し上げる。
まずは三ツ山委員から、第1回に参加された感想をお願いします。

三ツ山委員

大まかな設計案を見て、「ここがギャラリーなのか」というのが素直な感想である。設計者は、「施設の中身は、どのように使われるかを聞いて具体的にしていけるので、皆さんが行いたい活動を出してほしい」とのことだった。市民の意見集約は配付資料をご覧いただきたい。

ワーキングでは、ギャラリーをしっかりとした展示空間とするのか、ワークショップなど展示以外も行えるようにするのかという議論が行われていた。現在では、ギャラリーは多目的な場所として解釈が多様になっているので、皆さんが展示以外の様々な意見を出されていたのだと思う。そうすると、ギャラリーから連続する前の広場を人が休憩する空間とするのか、広場で活動するイメージを持つのか、という話が出てくる。設計者の言うギャラリーをガラス面とし、広場と一体利用を行うとすると、汚れてもよい活動ができなければならず、それならば前庭にトイレが必要ではないのか、という話もでてくる。

「このような活動が行いたい」という観点で議論を行えば、このような意見がでてくるのは当然である。多様な意見が出されるのはよいことだと思う。だが、前広場に面しているのはガラス面であり、必要なときに可動壁を足して使うことが前提となっていること、奥の壁が動くということを初めて聞き、「そうなのか」と思った。壁を取っ払ったらギャラリーでなくなる、というのが設計者のコンセプトのようだが、それは良くないのではないか。ギャラリーに関わる人間としては、動かない壁、しっかりとした壁を造っていただきたい。あざみ野で展示を行う際にも、可動壁の下の空間が作品の邪魔になるので、空間を板で塞いでいる。ギャラリーは、ただ壁があり作品が吊れる仕掛けがあれば良いというわけではない。

ガラス面はどうか。市民の中には嫌だという方から、外から見ると良いという方もおり、人によって意見が分かれることだと思う。

ただし、4面のうち2面が可動壁という発想は、「芸術文化創造センター」におけるギャラリーとして、小田原のアート系の中心となる場所だと考えると、手軽で儂い、希薄な場所であると言わざるをえない。また、このような話も、私は設計者から説明されていない。ただし、ホールやスタジオなど色々な機能がある中で、ギャラリーを施設の中心に配置してほしいと要望するのもどうなのか、という思いはある。

ギャラリーの形状が細長いという指摘もされていたが、幅が10mあればそれなりの醍醐味がある空間ができるので、それは最低限だ、という話は設計者に申し上げた。ただし、ギャラリーの中に可動壁をつくり、小ホール側の廊下にも展示を行ったとして、100号が60枚程度しか飾れない、とも申し上げた。

やはり、ギャラリーとしては、しっかりとしたホワイトキューブを要求すべきと思う。それを基本として、加えて搬入経路、水場、備品置場等が必要となるので、全体を400㎡のギャラリーとした場合、100㎡はバックヤードで確保せねば、あらゆる活動を支えられない。

市民の方がやりたい活動はたくさん意見が出ており、その大部分が出来るだろうと思う。ただし、現在の設計案では無理だろう。今のままでは、ギャラリーとしては笑われる空間となる。

井上委員

第2回は私が参加した。舞台系の事業について考えるというテーマで、2班に分かれ、7つの基本方針に沿って検討を行った。

1班では、「センターが発信拠点となり他施設の情報も発信できる体制をとるなど、“中心”としての役割を持つということ」、「若い人を育てることが必要」、「西湘地区の文化中心になる」、「小田原ゆかりの人物である北原白秋にちなんだコンクール」といった意見がでた。ハードについては、「事業を行うために絶対にこれが必要である」という意見は無かった。

2班では、「子どもを中心とした事業」、「5～10年かけて市民オペラに関わる子どもを育成し、上演する」、「子どもに良いものを観せる」、「小田原の特色を生かした創作ミュージカルやオペラ」、「様々な分野の展示ができる、全館を利用したアンデパンダン展」、また、設計については「華道の展示ができるように水場を設置する」といった意見が出た。

全体として、現在の市民会館では事業が頻繁に行われていない状況にあり、市民がセンターに必要な機能を実感できないのではないかと感じた。

ワーキングの報告は以上である。

2. 議題 (2) 芸術文化創造センターの重点事業について

井上委員

芸術文化創造センターの重点事業について、事務局から説明をお願いします。

事務局

(説明)

井上委員

重点事業について、ご意見を願います。

三ツ山委員

専用ホームページの立上げを早くしなければならない。「センター」とは建物のことではなく機能のことであり、情報集約かつ情報発信の場である。市民の活動を集約して発信する機能が非常に大切だと思う。例えば、市内の画廊や、若手アーティストが様々な場所で行うアートシーンもセンターが発信する必要がある。「発信」は、事業の要である。

小田原市各地で起きている様々なことの情報集約、情報発信、アーカイブ化が大切である。現在は、東京が中心の時代ではなく、面白いことを行い、きちんと発信すればインターネットを通じて即座に広がっていく時代である。このことは、事業とは別として、非常に大事な要となる。建物の完成を待たずとも、パソコンがあればできることなので、今からでも行っていくべきである。

また、そのような活動を行う方やNPOの方が集まるワークショップルーム、創造スタッフ室等の諸室は非常に大切である。例えば、会議が行える、机と椅子があり作業できる、ポスタープリンターを利用できる設備などの場所が必要となる。

今は、センターが建物以外のアートシーンと、どう繋がっていくのが気になる。「ある特定の場所のみ」となった時に文化が駄目になる。中心と周りを繋いでいくかことが、センターの役割である。このままでは、単なる市民会館となるだろう。センターは集約する場である、という発想が抜けないようにせねばならない。

また、活動の中には、施設を使った方が生き生きとする活動と、施設以外の場所で行っても意味がある活動がある。それらを受止め発信していかなければ、「場所取り、期間取り、予算取り」という、文化とはかけ離れた話になっていく。

小田原の良い点は、行政にぶら下がるのではなく、自立して活動している市民が多くいるということである。行政が市民運動を捕まえて発信していくことが、小田原の文化力となるだろう。

また、「子ども」というキーワードが色々な場所に出てくるのは非常に良い。ただし、芸術文化を「どの子どもやっごらん」と子どもに提供するのは、子どもを専門家やアーティストにするためではなく、子どもの内面を育てるということ、その経験を大人になる過程で活かしていくためだということを経験として持たねばならない。子どもを対象とした芸術文化について、各々違ったイメージを持つことは良くない。横浜市でも、ようやく「子どもの自立心を養う」というキーワードがでてきた。我々も、芸術文化を通して、子ども達の自立心に働きかけていく。

「どのような活動をするか」といった現在進行形の話も大事だが、「なぜ、市民に提供するのか、それによりどのような作用が生まれるのか」ということを考え、絶えず確認せねばならない。

伊藤委員

「センターとして役割を果たしていかなければならない」ということは理解しているが、それ

でもハコは建てられる。ならば、そのハコにあった事業展開を考えて行かねばならない。例えば小ホールでフルオーケストラの公演を行うことはないように、「事業にあった設備を整える」ということを、今一度押さえた方が良く感じる。

市民の皆さんの意見をみると、大ホールでは市民が借りるというよりは、次の三点が重心となるだろう。

一つ目は、大ホールに相応しい、質の高いプロの公演を聴く、観るということ。オーケストラ、ミュージカル、オペラ、歌舞伎など様々な意見が出されている。また、能舞台を造っての公演なども大ホールで行うことが可能である。

二つ目は、合唱祭、演劇大会、市民大会など、市民活動の全体的な活動の場となること。

三つ目が、毎年難しいかもしれないが、市民創作のオペラやミュージカルなどを行うということ。以上の三点を中心に事業を展開していくことが想定される。

小ホール、スタジオは、様々なことを行う場所として使っていく、という思想が、基本計画時からあった。これまでに場所が無いために我慢していたことを、市民が存分に行っていただく場となることが重要な役割である。

想定される事業としては、小ホール、スタジオを含めて一月ごとに音楽、演劇、ダンスパフォーマンスを行っていくなど。プロの公演も観賞でき、且つ自分たちの活動もする場となるとよい。また、自主事業に付帯して行われるレクチャーやプロとの交流などの関連事業は小ホール、スタジオを中心としてもよいだろう。市民活動スペースなども含めて、「身近に芸術を」ということを、この場に集約できると良い。

ロビーもその中に含まれる。例えば、ピアノが置いてあり、ワンコインコンサートを30分聴いて仕事に戻る、などが日常的にできる、ということがワーキングの端々で求められているのではないか。これはにぎわいの創出にもつながる。

ただし、先程三ツ山委員が仰ったように、文化活動はこの場だけで行われるのではなく、まちと繋がっていくことは必要である。

以前に、小田原市で現在行われている事業を示していただいた。例えば、市民音楽フェスティバルや市民文化祭、無尽蔵プロジェクト、茶会、映画祭などが行われている。それらが、その場で継続して行われていって、センターにも浸透させて、まちとの繋がりをつくれるだろう。現行の活動は活用していくのが良いと思う。

ゼロからのスタートではなく、既に行われているものについては、皆さんが発展的に出来るようにしていく。「それをどのようにやるのか」という打合せや企画の場として、センターを活用できればいいのではと思う。

現在、市ではアウトリーチに積極的に取り組んでおり、これからも取り組んでいくことと思う。今後は、アウトリーチやワークショップは単独で行うのではなく、大ホールでオーケストラ公演が行われる際に、それに関連したアウトリーチを行うなど、常に自主事業との関連性をもって組み立てていくといいのではないかと。ひとつの事業から波紋のように広がっていくアウトリーチやワークショップがあることで、センターから発信し、まちからセンターへ戻ってくるという、相互作業ができるのではないかと。

アウトリーチやワークショップの一番の享受者は子どもになる。子ども達が色々な表現に触れ、様々な表現があるということを知ることで、自立心を持つことにもなるだろうし、自分が今

ここにいてもいいのだと思えることになる。どんな事業にも子どもを対象とした付帯事業が行われることで他の地域以上に、「子どものために」というミッションを大人たちが共有し、達成することができる。

ただし、子どもだけではなく、大人も楽しめなければならない。大人、高齢者、家族での参加、近隣の地域の人たちが関わり、関係を持つことがまちづくりへと繋がっていく。どちらかだけに片寄らない仕組みにしていく必要がある。

抽象的だったかもしれないが、まずは大ホールで鑑賞事業を行い、今までに無かった、様々なものをお観せし、色々な表現に触れるということを体験することが必要である。

同時に、小ホールやスタジオなど、大ホール以外の場所を中心として、今まで場所が無いために出来なかったことをセンターで行い、試してみる。

現在、市民文化祭はホール争奪戦の種になっているようだが、それを、センター全体を使いこなす見本市のような事業として、一年間のひとつの山場とすることも考えられる。

子どもについては、夏休み期間を活用して、スタジオや大ホール、小ホールなどを使い、育成、発信の場とする。

また、年末には「くるみ割り人形」や「第九」など、年中行事の一環となる事業を一ヶ所入れていくのもよいだろう。その場合は、マンネリで構わないので、「毎年、あの時期、あの場所で、必ずこれを行っているね」という事業を一つ作ることで、思い出作りとなり、親から子へ10年、20年繋がっていく事業となる。そのような事業は、年末年始のどこかで一つ作ることを提案する。

伝統芸能も意見が出されているが、小ホールの音響をきちんと確保し、三味線や琴、謡など、伝統楽器の発表会やプロの演奏会も十分行える機能をつけていただけるはずなので、クラシックの室内楽等と交えて様々な表現を紹介していくことが可能ではないか。

雑ぱくに申し上げたが、こんな風に事業について整理して考えていく時期なのではないかと思う。

井上委員

伊藤委員のご意見と似ているが、色々なジャンルに亘って事業を行い、市民に知ってもらう、劇場に足を運んでもらうことが先決である。その中に、センターを方向付けることを差込んで行っていく。

大ホール、小ホール、スタジオも、基本はパフォーマンスアートとファインアートである。

市民意見も色々出ているが、センターとしてやっていくべきこと・出来ることと、センターでなくても他の施設でできていることがあるので、それについては今後整理をしていかねばならない。センター自体は、公演する場でもあり発信していく場でもあることが第一である。それはいきなり出来ないし、開館まで時間もないが、今からオープンに向けて、またオープンしてから、5年、10年かけて方向性を出していかねばならない。

ただし、市民会館が閉館すると、大きな公演を行う場所は、アリーナとセンターになる。市民はセンターのホールで、色々なものを観たいという欲求があると思う。音楽や演劇だけでなく、多くの人を楽しめるような、馴染みのある催しを観たいという希望も多いだろうし、それ

にも答えなければならない。当面はセンターの事業をある程度狭みながら行っていくしかないのではないか、という気がする。センターの性格付けをする上で創りものを行っていき、市民が行っていることも把握しながら、小田原でないと出来ないことを創っていくことが必要である。

また、ステージを通して子どもに良いものを観せ、感性を養うことを行う必要がある。厚木市文化会館でも、オープンして最初の10年は市民団体の育成に力をいれていた。まずは、市民団体に何が出来るかを探るために色々なことを仕掛けていった。その中で、子どもに良い物を見せなければならないと、教育委員会と組んで、「森は生きている」や、四季のミュージカル、二期会のオペラなど、一定レベルの公演を、学校などの組織に動員をかけ、劇場に足を運んでもらう、という取組みを相当行った。初めは子どもを動かすことを先生が怖がっていたが、それを説得した。

小田原は歴史があるので、文化祭に参加する人も多く、そのために劇場を押さえる期間も長い、ホールができると同時に見直し、小田原にいるプロと一緒にやっていくことを考えるべきだろう。アマチュアの発表だけが文化祭ではない。プロが魅力を感じて参加してもらえらる場にしなければならない。

小田原は城がある。城に関わる事業はかなりあるだろう。市民意識も城が中心となって出来ているかもしれない。それを壊さなくとも、城下町から世界に発信できる新しいものが出来るのでは、という気がしている。

当然、オペラ、バレエが上演できる施設を整えねばならないし、ものを創る上では稽古場が必要である。

全国の大会をどこまで誘致するかは別の問題だが、各地から人が集まる場合にも、大ホールの他に小ホールやスタジオなどの稽古をするための場があれば全国大会も誘致できる。そういったことが出来ると面白いのではないかな。

先日の市民ワーキングでも、子どもの育成が重要だという意見が沢山でていた。子どもが大人になっていく過程での精神面を良くする、醸成することにセンターが機能できるとよい。

伊藤委員

「小田原らしいものを」という意見が市民から多く挙げられている。小田原のホールなのだから、小田原でなければできないものをやるべき。小ホール、大スタジオ、時々は大ホールも使って、「小田原ものプロジェクト」をつくってはどうか。事業を単独で行っても、力にならなかったり、質の向上に繋がらない場合もある。

基本計画検討時に委員が強く言っていたことは、壁を取りはずしたり、ピアノがロビーに運べたりなど、できるだけゆるやかな使い方ができる、ということである。それを浸透させていくために、年に1回程度フェスティバル形式で事業を行うことにより、自由な使い方を提案していくことが必要と思う。

例えば、オーケストラピットはオペラやバレエの際にしか使用しないと思われるが、オーケストラピットが上がり前舞台として利用できるようになっている。これにより、より大きなオーケストラも乗れるし、能の上演をする時に張出し舞台になる。

「オーケストラピットはオペラだけ」などと固定的に考えるのではなく、「このような使い

方もできる」ということを考えながら設計をして頂きたい。

特に、ピアノは倉庫からロビーまで問題なく運べるようにしていただきたい。

先日、イギリス BBC 交響楽団の教育プログラムを見てきた。その1つはワークショップで演奏を練習したアマチュアオーケストラ員や子どもたちがプロの演奏会当日の開場時間前にロビーで演奏を行うというものであった。曲はコンセプトをもとにワークショップで創られた、ある意味前衛的であり、楽譜がある曲ではない。子ども、高齢者、専門教育を受けている子どもたち、という3つのグループが、ワークショップを重ねて出来上がった曲をロビーで発表していた。

これは一例だが、センターがそのようになると面白いと思う。それにはロビーやスタジオの活用が必要である。固定的に考えず事業をつくれると良いと思う。

三ツ山委員

現代、古典と言うが、昔の人がいるわけではない。300年前に作られた演目も、今行っていると考えればコンテンポラリーと言える。

「観る人が普通の人で演じる人が特別な人」、「芸術は高尚であり、分かるためには知識を得なければならない」という、文化の中で出てくる区別、差別をなくす。勉強しなければ分からないこともあるが、スムーズに入口をくぐる事ができれば、面白いと思う人は沢山いるはずである。好きな人も沢山いるが、嫌いな人も沢山いる。わからない人に面白く、魅力的に紹介する教育普及が大きなキーワードとなってくる。

現代は、観る人もやる人も生きているので、コンテンポラリーだなと感じる。運営の中で機能として組み込まれていくと、スタッフにも参加する人にも「敷居が低い」という言葉が段々なくなってくる。私たちの時は「敷居を低くする」という言葉がよく出てきたが、違うイメージが必要になってくるのだと思う。

井上委員

次に、全体での事業展開を考えたい。施設ごとに何が必要で、どのようなことを考えていかねばならないかを話し合いたい。

まず大ホールについて話し合う。先程、伊藤委員から「オーケストラピットは前舞台として使える」というお話があった。オーケストラピットはパフォーマンスアーツ、特にオペラやバレエを上演する際には必ず必要になる。また、張出し舞台として使えることにも利用価値がある。

今は中学校、高校で吹奏楽が盛んである。最近の吹奏楽のステージでは、演奏者がフォーメーションを組んで動きながら演奏するドリル演奏が流行し、一般的になっている。それを行うためには、広いスペースが必要となってくる。

今は何でもありの時代なので、キャパシティの大小は別として、最低限必要なものは揃えねばならない。

ヨーロッパには600席規模のオペラハウスが沢山ある。小さな規模では、小さい規模の催しを行っている。そう考えると必要なものが出てくると思う。

伊藤委員

音楽堂のように、人の手で設営しなければならないオーケストラピットは大変なので使われなくなるが、今の時代はそうではない。オーケストラピット+張出し舞台ならば、演出、観賞の幅が広がるのであった方がよい。条件は、必ずしもオペラに特化したオーケストラピットではないということ。もし、オペラに特化したオーケストラピットならば、それほど必要性があるわけではないと思う。

また、残響の話がある。演劇、音楽、伝統音楽で適切な残響は違うので調整できねばならないが、残響可変などで工夫することで、多用途に使えるようになる。基本計画時にもそのように話していた。完璧でないとしてもこうした現代の技術は使っていくことが大事である。

大ホールは色々な演目を行うので、このあたりが胆になるのではないか。1階だけ使っても使い勝手が良いホールとして設計していただいているはずである。

また、親子室が4階にあるのは直していただきたい。

事務局

親子室は場所を修正し、現案では2階に設ける予定である。

井上委員

可動式の音響反射板はあるのか。

事務局

設置予定である。

伊藤委員

音響調整装置のような、残響可変ができるものは造るのか。

事務局

現在検討中である。

井上委員

残響の調整には、側面の壁を回す、天井に板を付けて向きを変える、などがある。そのような方法で、コンサートホールのような残響が取れるのか。

伊藤委員

勝又委員によれば大丈夫とのことだった。残響も長ければよいというものではない。音楽以外の催しの際に、残響を減らす工夫が出来ればよい。例えば、市来委員が毛布でも吸音が可能と仰っていたが、極端に言えばそのような話になる。ただし、吸音方法を考えておかねば他の演目の際に大変になるので、きちんと担保できるよう、今一度確認していただきたい。

井上委員

どちらのジャンルに重点を置くかだが、どこかでは妥協していくしかない。

厚木市文化会館では、残響時間 1.6 秒だったが、もう少し長い方がいいと言われ、リニューアルの際に残響時間を長くした。しかし、音楽では良いが、演劇では台詞が聞き取りづらいということもあった。特に PA を使う演劇では、少し厳しいという印象を受けた。

また、私は小田原という特性を踏まえ、大ホールで歌舞伎を行った方が良いと思う。小田原市民会館が出来た頃、当時の小田原市長が歌舞伎好きなこともあり、小田原が最初に松竹の歌舞伎を始めていた。ただし、段々と小田原近隣の沿線に歌舞伎を行う劇場が増えていくと、歌舞伎を上演しなくなっていった。だが、今でも歌舞伎を望んでいる人はいるだろう。新しく出来る劇場では、伝統的な演目もいくつかのジャンルで上演していただきたいと思うし、そういう設備も、仮設でも良いので上演出来るようにしていただきたいと考えているが、どうか。

伊藤委員

巡回公演だけならば、必要ないかとも思う。「小田原歌舞伎」と銘打てる歌舞伎公演なら良いと思う。そういうものを創っていく気概がほしい。開館時に所作台を買い、こけら落としで使い、その後はそのまましまっているというケースも少なくないと聞いている。買うのならば使いこなさねばならない。使いこなせる伝統文化がある小田原ということアピールする必要がある。歌舞伎だけではないが、大ホールはオペラ、バレエ、オーケストラ、歌舞伎など、現代において享受できるものは、何でも上演できる、観賞できるという環境を、子ども達のために作るとよい。そのような方向で事業展開をするには、歌舞伎の設備を整えることも大事である。

井上委員

現実問題として、歌舞伎のオリジナル公演を創るのは非常に大変である。勿論、小田原には曾我物等の地盤があるので、いずれは創るようになるかもしれないが、まずはきっかけとして、巡回公演を上演する、国立劇場の子どものための歌舞伎を持ってくるという方法もあるだろう。そのためには、最低限の設備が必要となる。

所作台は、能、箏曲、謡曲等にも使える。センターにて伝統芸能が上演されない、というのは考えられない。

伊藤委員

雅楽等の曲を現代の作曲家が作るということも行われている。和物・洋物、普及型・観賞型といった分類の仕方から離れた部分で事業展開を考えていく必要がある。

伝統音楽は古いものではなく、昔からある素晴らしいものと捉えて事業を創っていかねばならない。

井上委員

例えば、「日本舞踊×オーケストラ」として、野村萬斎と 40 人の舞踊家が共演し、ボレロの曲で踊るといった公演も行われている。伝統的なものから世界へ発信できる作品を創ることがで

きる。そのようなことに対応できるセンターとしたい。

井上委員

次に小ホールについてご意見を伺いたい。基本計画では、様々なジャンルに対応できるということがコンセプトとしてあった。

先程の伊藤委員のご発言では、定期的にプロの公演を行いホールの様々な使い方を皆さまに紹介する、また質の高い公演を定期的に上演するというご提案があった。補足の説明を頂きたい。

伊藤委員

そのようなプロの公演を行いつつ、「市民の方々の活動は、まずは小ホール、大スタジオでやってみてください」ということが大きな目的である。小ホールと大スタジオを、あまり区別して考えたくない。もちろん、ホールの機能は違うが、演劇を行うには小ホールではなく、大スタジオの方が使い勝手がよいかもしれない。小ホールでも発表会等の小規模なバレエの公演ができるが、コンテンポラリーダンスにとっては大スタジオが適しているかもしれない。「どういう使い方をしたいか」によって、小ホールと大スタジオを選択できるように考えたはずだ。

小ホールは固定席に座って鑑賞する。基本計画時は、伝統音楽や室内楽のような小規模公演を小ホール行うという話もあった。何を重心に音響を考えるかという問題はあったが、小ホールも残響可変ができるのか。

事務局

まだ決まっていない。

伊藤委員

絨毯でもカーテンでもよいので、残響可変ができる必要がある。ちょっとしたことで聴こえ方が全くちがうので、そこに注意して音響をつくっていただきたい。

2、3ヶ月に1回程度にはプロの演奏も行い、その間は、出来る限り市民の方に使っていただく場所としたい。出来るだけ使い方の制限をせず、自由な使い方をしていただきたい。

井上委員

私の経験だが、昭和音楽大学が厚木にキャンパスがあった時に、毎年小ホールにて、出演者が数名のオペラをやっていた。生演奏だがオーケストラピットは無いので、客席前方の椅子を一部取り外して上演した。

実際にホールがオープンすると、様々なことが起きる。そのためには、椅子を取り外すことで対応する、といったことも考えていかねばならなくなる。

小田原には相模人形芝居という国の指定を受けている下中座という座がある。私を知る限り、神奈川県内では一番しっかりしている座だと思う。センターとしては、それが上演できる形も考えていかねばならない。そのために特別に舞台をつくる必要はないが、どこかの場所で上演することを考えていく必要がある。

次に、大スタジオについて。市民の方々にも、大スタジオの使い方がイメージできていない方が少なくないように感じる。大スタジオは、単なる稽古場ではなく、小ホールとは別だが公演ができる場所として考えていく、という方向か。

伊藤委員

基本計画策定時に、小ホールの客席形状をどうするか、といった議論があった。小ホールは固定席で鑑賞するような音楽や伝統芸能、演劇などの上演を想定した多目的ホールとする。

また、大スタジオを演劇やダンス等の発表が可能な平土間空間とし、ギャラリー等との連携や、簡単な飲食等も可能な自由な発想ができる空間とする」という整理を行った。小ホールと大スタジオは、双子児のような関係になっている。

大スタジオは演劇やコンテンポラリーダンス、ジャンル横断の催し、ギャラリーと連携しての展示やインスタレーション、簡単な飲食をしながらのジャズ公演、などを想定している。そのために、照明のボタン等はしっかりとある必要がある。美術やインスタレーションにも使えるだろう。自由な発想で使っていただきたい。

三ツ山委員

現場にいると、「この部屋を全部空にできるか」という発想がある。空にして初めてできることがあるので、大スタジオの条件は、空になることである。空間に持ち込んだ時に意味のあることができるので、それができるようにせねばならない。きちんと考えねば、逆に小スタジオが物置と化してしまうだろう。

多機能なのは良いことだが、そのためには機材や物が必要となる。合理的に物をしまえる場所を、勇気をもって作らねば、運営するのが大変である。

「大スタジオが空にできること」という条件は絶対である。

井上委員

そのためには収納を考えねばならない。行う場合には、使っていない他の施設に移すことも考えられるか。

三ツ山委員

設計者は、利用者に手厚く設計を行う。運営する側として、多くの備品等をどう扱うのか、そのイメージを伝えねばならない。大スタジオに可能性を持たせるためには、それを支えるバックヤードがなければならない。

井上委員

大スタジオは演劇公演がイメージされていると思う。平土間ならば、真ん中にステージを造ることもできる。自由に使えて、自分たちでどうにでもできるというのは面白い。

伊藤委員

この場所は、基本計画中でも目玉の一つだと思っている。

三ツ山委員

壁がギャラリー仕様ならば、映像の上映もできる。

井上委員

公演の他、稽古場としても利用できるし、レセプションもできる。飲食しながらの音楽公演や映画上映なども想定している。小ホールのように舞台と客席が離れている空間とは違う、工夫次第で面白い使い方ができる。

中スタジオ、小スタジオは稽古場や、物を創る時に作業する場所としても使えることが必要となってくる。このような部屋は、あればあるほど助かる。

三ツ山委員

曖昧な部屋は、とても役に立つ。

井上委員

「××ルーム」などと、用途を限定しない部屋は便利に使える。

伊藤委員

その場所を制約しなければ、ワークショップの発表の場にもなる。名前が無い部屋というのは、それが機能になる。そこが胆になってくる。

井上委員

スタジオというと、「録音スタジオ」などを思い浮かべるが、そうではなく自由な空間であるということをご理解いただきたい。

井上委員

次にギャラリーについて。市民ワーキングでは、ギャラリーだけでなく、大スタジオや中スタジオを使つての展示会を行いたい、という話もでていた。ギャラリーのあるべき姿についてどのようにお考えか。

三ツ山委員

「美術館ではない」ということは当初から知っている。美術館・博物館には作品を資料として収集する機能等があるが、この場所は展示機能としてのギャラリーである。

小田原のアートシーンは、「このギャラリーだけで我慢してください」という訳ではない。

「税金を使って自分の発表をするのか」という問題もある。画廊にて、自分でお金を払って発表するのが基本、ということもある。

ただし、それが市民に還元されてこそ、税金を投入する意味がある。そこを担保できなければ、芸術をしている人としていない人で区別することになってしまう。

新しいものに壁をつくるのではなく、それを吸収するような流れが生まれなければ、「アート」と呼ばれている営みがバラバラになってしまう。新たな自分を知る、新しいことに興味を

持つという心の作用、積極的に生活していくということが、市民力を高めていくことになり、前向きな生活につながる。税金をつかって市民を芸術家にするわけではなく、自分の生活をつくり出せるようになることが必要なことであり、それには演者やアーティストがお手本となる部分があるのではないか。だからこそ、税金を使って文化や芸術を紹介している。

今は、設計や運営の話をしているが、もう少したつと、どのような人が職員になるのか、ということを決めることになる。最終的には、人に尽きるだろう。

伊藤委員

ギャラリーでも1年に1度程度、全国的、世界的に面白いアーティストの企画展のようなものを行うかもしれない。その時にワークショップやギャラリートークを行うなど、アウトリーチ的、ワークショップ的なものを必ず付帯させていく。また、段々と他のジャンルとコラボレーションしていく、ということを重ねていくことが大切である。皆さんに知っていただく、交流できることが必要と思う。

また、「小田原ゆかりの人」にこだわって企画をしたいと思うかもしれないが、これまで小田原に関係なかった人を結びつけ「小田原ゆかりになってもらう」ということも大切だと思う。小田原出身のアーティストを紹介する、そうでは無い人には、何度も足を運びたくなる小田原となり、継続していく、観賞事業の中でそういう人を見つけて取上げることも必要だと思う。そのような企画展が、年に1回程度はあるといいのではないか。

最近、映像を用いた展示が多くあるので、映像ができる設備が必要である。映像への対応は大丈夫か。

三ツ山委員

映像については大丈夫だと思う。ただし、冒頭にも申し上げたが、ギャラリーはプレハブではない。今のギャラリーに賛同はしていないので、強く言っておいていただきたい。

井上委員

市民ワーキングでも、「釘が打てる」、「壁が塗れる」といった要望がでていますが、その点についてはどうか。

三ツ山委員

釘を打つのは構わないが、その後、専用のパテを使って、釘穴をリタッチできるのか。また、壁を塗り直して現状復帰していただけるのか。大概の場合、そこまでできないので、ワイヤーで吊るして展示する、という選択になる。我々が展示を行う際には、必ずリタッチを行っている。それが最初から駄目なわけではなく、そうできるように教えればよい。

設計者は「ぐちゃぐちゃ」という表現をされていたが、それはリップサービスだろう。実際には難しい。本当に必要なことならばいかようにも対応できるが、それよりも、きちんとした壁をつくるのが先決ではないか。

ギャラリーの形状が細長いのは仕方ないが、きちんとした、不動の壁で設計を行っていただきたい。

井上委員

私から、考えて頂きたいと思うことが数点ある。

センターが完成すると、テレビ放送が来るので、対応のための設備が必要となる。例えば、ケーブルや、大きな車がくるということを考慮して設計を行っていただきたい。施設が使いやすければ、声をかければテレビ放送が来る。スタッフが動きやすいことを考え、設計をおこなっていただきたい。

また、経験上、貴賓室はあったほうが良い。無いと皇族を迎えるときに困る。小田原という土地柄は、そのような方がいらっしゃる可能性がある場所だと思う。また、大ホールでの観賞を考えるなら、貴賓室から大ホールに繋がる動線が必要である。通常、市民ホールのレベルでは造ることは少ないが、余裕があれば造っていただきたい。

また、ピアノは複数の場所に置いた方が良い。沢山買えないのならば移動ができればよい。スタンウェイと国産ピアノをセットで置くホールが多いが、その2台を大小ホールにおき、大スタジオにもピアノがあったほうが良い。また、2台ピアノの演奏を行う際には同じ種類のピアノが必要となるので、行き来ができなければならない。フルコンサートピアノを動かせる通路が、必ず必要となる。絶対条件として設計に取り入れていただきたい。

伊藤委員

現在の設計案では、ピアノ庫に3台入る広さがあるのか。狭いように感じる。置く場所が分散していても良いが、それぞれに空調が整ったピアノ保管庫が必要であり、最低3台は必要となるので考慮をお願いしたい。

井上委員

事業については、今後も議論していく予定である。本日は、第二次設計案に向けての要望を中心にお話していただいた。

三ツ山委員

次の設計案が出てから、また議論を行いたい。

2. 議題 (3) その他

井上委員

事務局から今後の日程確認をお願いする。

3. 閉会

井上委員

それでは、本日の議事については全て終了したので、これにて会議を閉じさせていただく。